

カルロス・ルイス・サフォン著、木村裕美訳「天使のゲーム、上」集英社文庫、集英社 2012 年 7 月 25 日刊を読む

1. (1) 作家というのは、自分の書いた物語とひきかえに、わずかな金や賛辞をはじめてもらったときのことを、けっして忘れない。
(2) 甘い毒にも似たうぬぼれをはじめて血に感じ、その瞬間に、まず思う。
(3) これで才能のなさを他人に見ぬかれさえしなければ、自分も物書きとしての夢を見つづけながら、屋根のある場所に住め、1 日の終わりに温かいものが食べられ、しかも最大の望みだつて実現する、つまり本人がこの世から消えても、つまらぬ紙っぺらに印刷された自分の名前はきっと生き残ってくれるだろうと。
(4) そのときの記憶を、作家は、永久にひきずって生きるはめになる。
(5) 思えば、あれが運のつき。どこかで自分の心を売ったまま、あとは、ただ書きつづけていくより他ないからだ。
2. ぼくにとっての“はじめて”は、遠い 1917 年 12 月の、ある日におとずれた。
3. (1) 当時、ぼくは 17 歳、『産業の声』紙という落ちぶれた新聞社で働いていた。
(2) 鬱々としたオフィスがある洞窟^{うつつ}まがいの建物は、昔の硫酸工場だけあって、腐食性の蒸気がいまだに壁からにじみだし、什器^{じゅうき}から、服から、気力から、はては靴底までボロボロにしていた。
(3) 天使の像や十字架がひしめくプエブロ・ヌエボの墓地裏にあるので、遠目だと、建物の輪郭が、地平線上にシルエットをなす霊廟群^{れいびようぐん}と見分けがつかない。その地平線をつき刺すように、無数の煙突や工場がならび、バルセロナの上空に、緋色と黒の黄昏^{ひいろ たそがれ}を永遠につむいでいた。
4. (1) 自分の人生が変わることになる夜、ぼくは終業時間まぎわに、副編集長のパシリオ・モラガス氏からお呼びだしをいただいた。
(2) 編集部^{編集部}の奥にはめこまれた薄暗い穴倉^{くわくら}部屋は、彼の執務室にもなれば、葉巻の喫煙所にもなっている。

[コメント]

カルロス・ルイス・サフォン著、木村裕美さん訳のベストセラー「天使のゲーム」(上)の書き出し。是非、御一読を。